

史 跡 斎 宮 跡

平成元年度現状変更緊急発掘調査報告

平成2年3月

明 和 町

序

「幻の宮」と呼ばれた斎宮の調査がはじめて行われたのは、昭和45年であります。そして10年が過ぎ、昭和54年には国史跡の指定を受け、さらに、10年後の平成元年は、斎宮跡が大きく変わった年であります。それは、「斎宮歴史博物館」が開館し、「三重県埋蔵文化財センター」も併設され斎宮跡だけでなく県内の埋蔵文化財の拠点になったこと、また、博物館の建設が決定した昭和61年からすすめてまいりました古里地区北部の公園整備、博物館への進入路である歴史の道、散策道なども完成しました。さらには、史跡の保存・管理・活用と観光とが一体となり文化の振興を図っていくため財団法人「国史跡斎宮跡保存協会」も設立したことであります。

さて、このように斎宮跡の保護・保存・活用が進み、広く国民の遺産として評価される一方、140haに及ぶ広大な史跡内に600世帯もの住民が生活している特殊性から、平成元年度には、57件の現状変更等許可申請が提出されました。これらの中には、史跡整備に伴うものもありますが、個人住宅の新築・増改築や、住民の生活に欠かせない電柱・道路・側溝の改良などがほとんどであります。

この報告書は、その中で事前調査が必要であった16件のうち13件についての結果をまとめたものであります。これらは小規模なものがほとんどでありますが、斎宮跡の究明に貴重な資料を提供してくれるもので、これらの成果の積み重ねにより、斎宮跡の姿がより明確になることを期待するものであります。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました地元の方々や、発掘調査及び報告書の作成にご協力いただいた斎宮歴史博物館並びに関係各位に対して深甚の謝意を表する次第であります。

平成2年3月

明和町長　辻　英輔

例　　言

1. 本書は明和町が平成元年度に実施した史跡斎宮跡の現状変更緊急発掘調査の結果をまとめたものである。なお、第81-3・4・5・6・7・12・14・15・16次の発掘調査は、国庫及び県費の補助金の交付を受けて実施したものであり、第81-1・2・8・9・10・11・13次の調査は、それぞれの原因者が費用を負担したものである。第81-1・2・9次調査については、別途報告書作成の予定である。
2. 調査は明和町が調査主体となり、斎宮歴史博物館調査課及び明和町斎宮跡保存対策室が担当した。
3. 発掘調査・整理及び本書の作成には、斎宮歴史博物館調査課の田阪仁、泉雄二、上村安生、御村充生及び明和町斎宮跡保存対策室の中野敦夫があたり、板眞弓美、松田早苗、橋本奈保子、尾家恵がこれに協力した。
4. 遺構実測図、遺構表示などは、すべて斎宮歴史博物館刊行の調査概報に準じている。

目 次

1. 前 言.....	1
2. 第81—3次調査.....	2
3. 第81—4次調査.....	4
4. 第81—5次調査.....	5
5. 第81—6次調査.....	6
6. 第81—7次調査.....	8
7. 第81—8次調査.....	9
8. 第81—10次調査.....	10
9. 第81—11次調査.....	11
10. 第81—12次調査.....	11
11. 第81—13次調査.....	12
12. 第81—14次調査.....	13
13. 第81—15次調査.....	14
14. 第81—16次調査.....	15

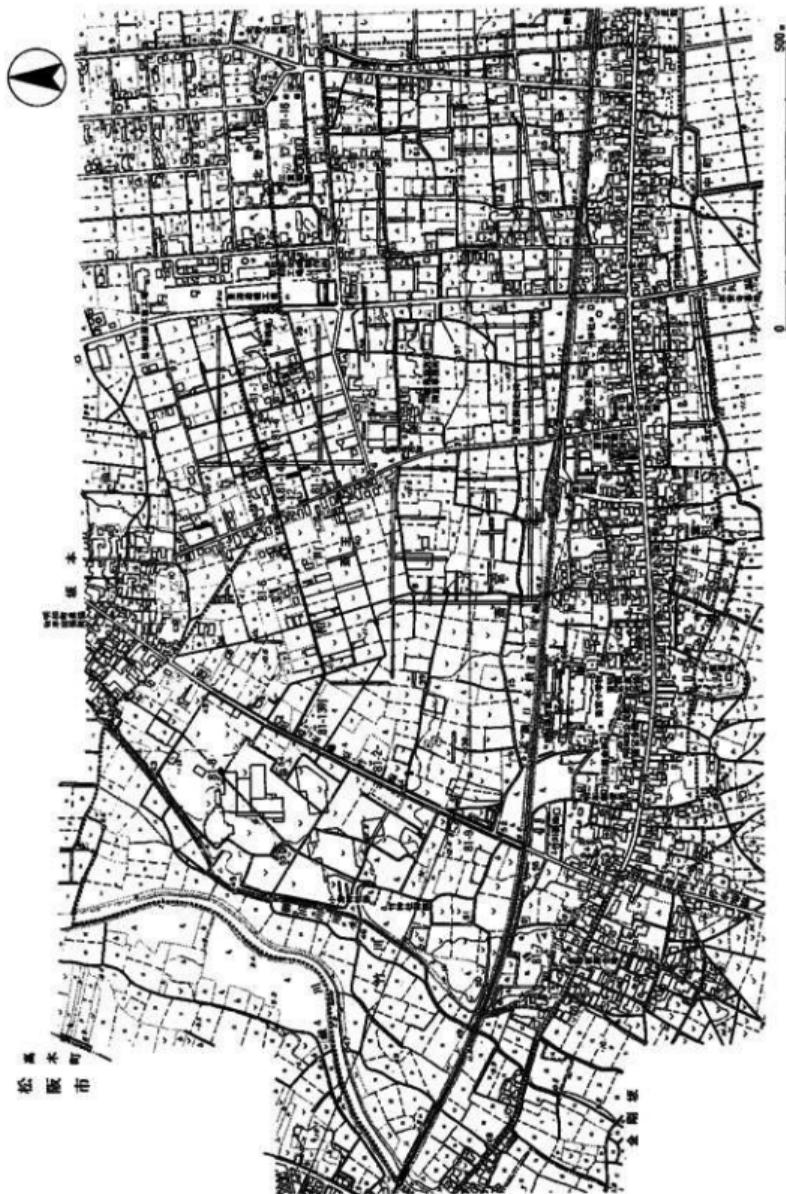


fig. 1 発掘調査箇所位置図 (1 : 1000)

1. 前 言

平成元年度の現状変更に関する許可申請は、個人住宅に関するもの33件、史跡内住民の生活環境に伴うもの17件、斎宮歴史博物館を中心とした周辺整備に伴うもの7件の合計57件が提出された。このうち事前に発掘調査が必要であったのは、前年度に申請された5件を含めて16件である。調査面積は、7,091m²に及び個人住宅に伴うものは、1,061m²で残りの6,030m²は生活環境整備や博物館周辺整備などの公共事業に伴うものである。

調査場所は、宮城中央北端の藤林・東殿地区において6件、宮城西部の塙山・古里地区において4件、宮城南部の旧参宮街道を挟んで5件と宮城の外周に点在している。保存管理計画の土地利用区分でみると第3種保存地区12件、第4種保存地区1件、史跡と接する地区3件である。なお、第4種保存地区的現状変更是、斎宮小学校の施設整備に伴うものである。

今年度の調査は、宮城北部を東西に横断する町道塙山線(第81-1次調査)と南北に走る県道南藤原・竹川線(第81-2・9次調査)のほかは小規模なものであった。

このうち宮城中央北端部では、第81-1・4・12・14・15次調査の5件が集中し、その結果史跡南西の古里地区から宮城の北を通り史跡東端を南北に巡る大溝を第81-1・4次調査で検出した。

また、史跡外で隣接しているために調査したものは3件あるが、第81-10次調査では弥生時代後期の竪穴住居が検出されており、隣接する露越遺跡との関連が考えられる。

第81-16次調査では、綠釉陶器片や平安時代末期の柱穴なども検出されており、斎宮跡の東部北端の範囲がさらに広がることが考えられる。

年 度	現 状 変 更 申 請 数	発 掘 調 査 件 数	調 査 面 積 (m ²)	補 助 金 事 業 調 査 件 数	補 助 金 事 業 調 査 面 積 (m ²)
S54	33	17	3,968	12	996
55	60	12	1,281	10	815
56	53	12	5,416	10	696
57	50	8	657	7	577
58	52	16	3,757	10	1,440
59	30	15	2,884	12	1,589
60	39	8	1,260	5	1,014
61	54	12	1,845	9	1,507
62	57	16	2,854	13	1,620
63	46	17	8,820	7	1,131
H元	57	16	7,091	9	1,061

2. 第81-3次調査(6ADS-M)

調査場所 多氣郡明和町大字斎宮字木葉山137
原因 農業用倉庫新築
調査主体 明和町
調査担当 斎宮歴史博物館
調査期間 平成元年7月4日～7月15日
調査面積 180m²

1) はじめに

当申請地は斎宮駅から

南方約300m、参宮街道
から南へ約150mで、宮
城の南端部に位置する。
これまで周辺の調査は、
町道を挟んで、すぐ西側
で第53-11次調査、第58-
6次調査を実施している。

第53-11次調査からは、
平安時代前期の掘立柱建
物2、奈良時代の竪穴住
居1、溝1が、第58-6

次調査からは、平安時代

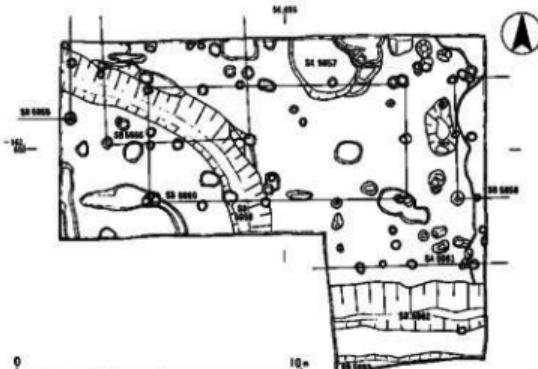


fig. 2 遺構実測図(1:200)

末期の掘立柱建物1が確認されている。

2) 調査概要

主な遺構としては、掘立柱建物4、塹1、溝3、土塙1がある。S B5955とS B5956は平安
時代前期、S B5960は平安時代後期のものである。S B5959に関してはS B5960の廃とも考え
たが、柱間寸法を異にしているので別棟と判断した。S B5959の時期については出土遺物が余
りにも少なかったため平安時代だけとしか判断できない。S B5960は4間×2間の東西棟で、
柱掘形は一辺約0.3m、深さ0.4mである。S B5956は南北棟、S B5959は東西棟、S B5955に
ついては棟方向、規模とともに不明である。

土塙SK5957は2.0m×2.4m、深さ0.2mの規模をもつ。平安時代前Ⅰ期の杯、皿、壺のほか

黒色土器や鉄斧などの多種の遺物が出土した。S B5955・5956と同時期の可能性がある。

S D5958は調査区の西北の隅から南へ大きく曲がりながら走る溝である。幅約1.5m、深さ0.45mで、鎌倉時代前半の土師器鍋などの遺物が出土している。

S D5962・5963は出土遺物がほとんどなく時期の決定は難しいが、鎌倉時代以降の溝と考えられる。なお、S D5962・5963は上面で検出したときはひとつの溝であったが約1.5m下げたところで2条の溝に分かれた。S D5962の様形はS D5963のものと類似しているが、今回の調査では両者の関係は不明であった。

今回調査された場所は宮城の南端部にあたるため、南限の遺構の検出が期待されたが、調査面積も180m²と小さかったので確認できなかった。

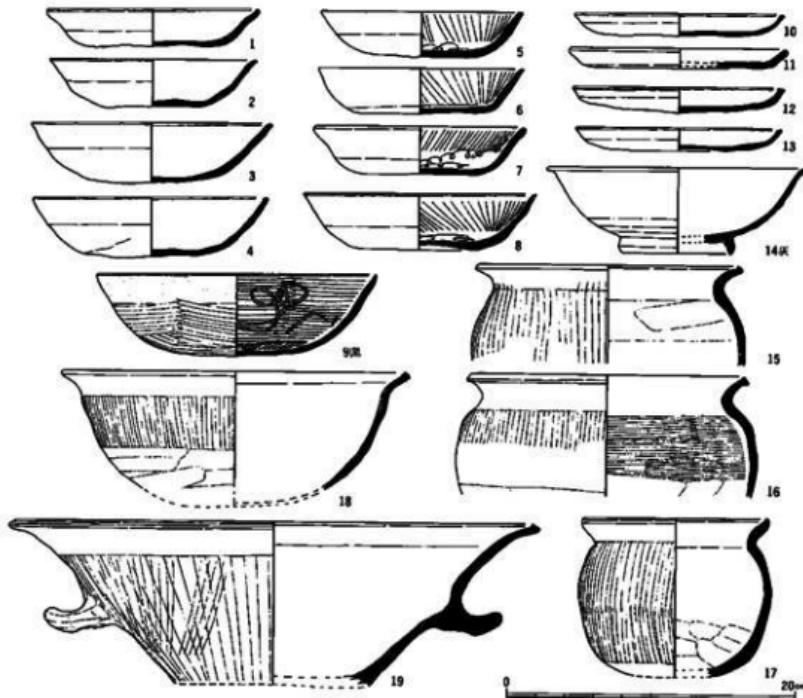


fig. 3 遺物実測図 (1 : 4) S K5957 ; 1~19

3. 第81-4次調査(6 A E D - J · K)

調査場所	多気郡明和町大字斎宮字楽殿2881-2
原因	個人住宅及び倉庫の新築
調査主体	明和町
調査担当	明和町斎宮跡保存対策室
調査期間	平成元年7月5日～8月9日 平成2年2月2日～2月16日
調査面積	214m ²

1) はじめに

当申請地は史跡の中央北部に位置する。調査区は北と南にわかれ、北調査区は、東西8.0m南北8.0mと長さ19.5m、幅1.6mのトレンチを、南調査区は東西8.0m、南北5.0mを設定し、調査した。周辺の調査では、第6-1次調査が、また、当該地のすぐ東側で第76-14次調査が実施されているが、遺物はほとんど出土しなかったので性格は不明である。

2) 調査概要

調査の結果、造構面までの深さは北調査区で約0.4m、南調査区で約0.5mである。検出された遺構には北調査区で鎌倉時代の溝SD50がある。このSD50は幅約3.0m、完掘しなかったので深さは不明であるが、これは史跡南西の古里地区(博物館付近)から宮城の北側を通り、さらに史跡東端を巡る大溝で、塚山地区で実施された第76-1次調査で幅約3.0m、深さ約4.0mの規模である事が確認されている。他に溝、土塙らしきものを検出したが、遺物は出土しなかった。

南調査区では、柱穴らしきもの、土塙などが検出されたが、遺物がほとんど出土しなかったので性格は不明である。宮城の北部にある楽殿地区からは、これまで実施されている調査によれば、斎宮寮に直接関係するような遺構は検出されていない。しかし、楽殿地区の西側に隣接する篠林地区から古里地区にかけては奈良時代の掘立柱建物、竪穴住居、土塙が、東側の西前沖地区では平安時代の掘立柱建物、土塙などが確認されている。

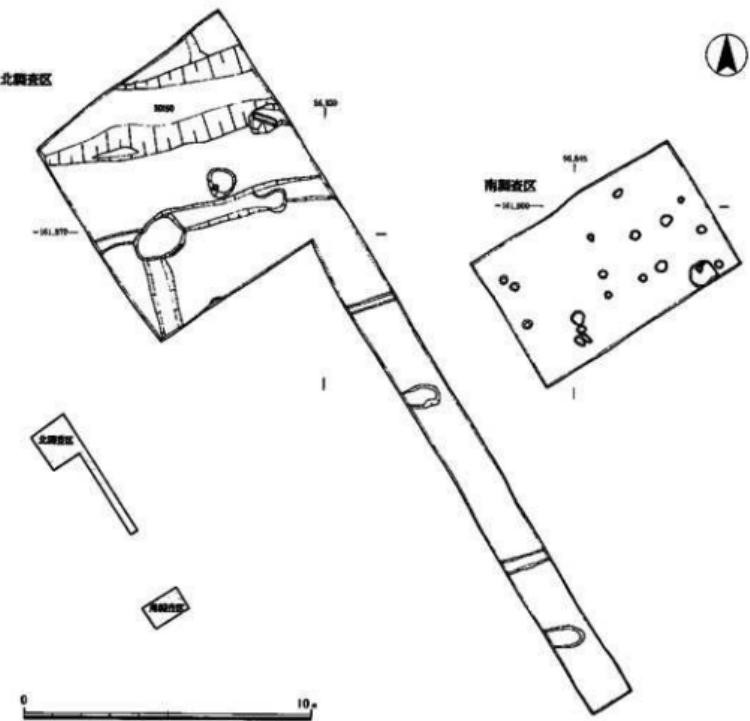


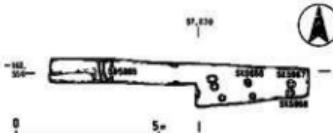
fig. 4 造構実測図 (1 : 200)

4. 第81-5次調査 (6 A F Q - C)

調査場所 多気郡明和町大字東宮字中西5972-2, 598-405
 原因 個人住宅新築
 調査主体 明和町
 調査担当 東宮歴史博物館
 調査期間 平成元年8月16日～8月18日
 調査面積 14m²

1) はじめに

当申請地は近鉄線南側にある竹神社の南東約200mの位置である。北側約50mを参宮街道が通過する。宮域でみると南側東端部にあたる。



2) 調査概要

調査地は個人住宅新築に伴うもので、調査面積は約14m²と小規模で、鎌倉時代の溝1、小土塁群SK5966~5968を検出した。

発掘区の東側で検出された小土塁群は、調査範囲が狭かったため建物の柱穴かどうか判断することはできなかった。しかし、SK5966・5968には川原石が投げ込まれており、極めて類似性を持つ小土塁であった。遺物は、SK5968から明らかに火を受けている鎌倉時代の土師器の小皿が、SK5966からは動物の後脚部（土製）または何かの土器の脚部らしい破片が、SK5967から土師器の鍋片が出土した。

なお、調査区の西端は大きく攪乱をうけており、かつて田園であったところに客土して宅地に転用したことは明白で、攪乱はその後のものと考えられる。かろうじて残ったSD5965も鎌倉時代のものと考えられる。

5. 第81-6次調査(6ADD-F)

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字篠林3139-1

原因 盛土

調査主体 明和町

調査担当 斎宮歴史博物館

調査期間 平成元年8月21日~8月28日

調査面積 112m²

1) はじめに

当申請地は斎王の森の北西約300m、宮域の中央部にあたる。周辺では、すぐ西側で第25-3次調査が、南西約50mの所で第33次調査が実施されている。第25-3次調査では奈良時代の柱穴、溝、土塁などが検出され、第33次調査では方形周溝、円形周溝、奈良時代の竪穴住居、掘立柱建物、土塁、井戸などを検出している。なお、調査区がある篠林地区からは、博物館がある古里地区を含めて奈良時代の遺構が数多く検出されている。

2) 調査概要

今回の調査地では、現代の攪乱土塁も多く見られたが、竪穴住居1、掘立柱建物2、土塁1、

溝3を検出した。

発掘区の南隅で検出した竪穴住居S B5975の平面規模は不明だが、深さは0.35mで、奈良時代中期の土師器皿が出土している。また、この竪穴住居の真横でSK5976を検出し、この土塙からは、土師器長胴壺の破片を多量に出土した。現段階ではこのSK5976をSB5974の柱穴の一部と考えている。時期は奈良時代後期と判断する。SB5973も掘立柱建物の一部と考えられるが、出土遺物が細片のために、時期は奈良時代としか判断できない。

発掘区の中央北で検出した土塙SK5972は1.4m×1.0m、深さ0.2mで、東側約3分の1は調査区外で検出できなかったが、奈良時代中期頃の土師器壺が出土している。調査区の北端は大きく削平されており、新しい客土の跡がみられた。出土遺物がまったくないために時期は不明だがSD5969・5970・5971の3条の溝が確認された。

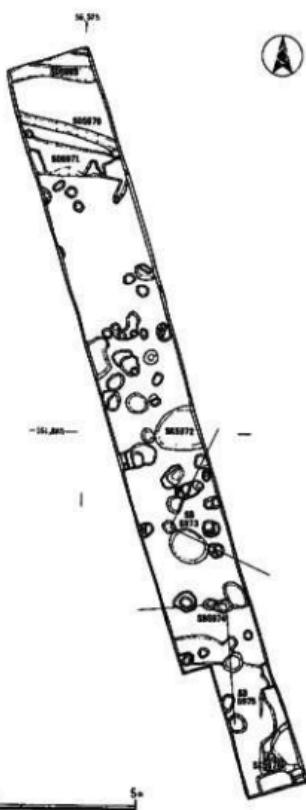


fig. 6 遺構実測図 (1 : 200)

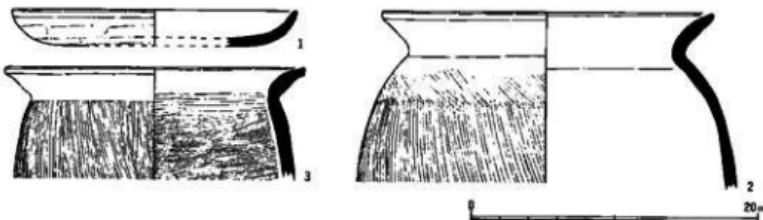


fig. 7 遺物実測図 (1 : 4) SK5972; 1・2、SK5976; 3

6. 第81-7次調査(6ABL-U)

調査場所 多気郡明和町大字竹川字中垣内430-7
原因 倉庫新築
調査主体 明和町
調査担当 蒜宮歴史博物館
調査期間 平成元年8月31日～9月6日
調査面積 36m²

1)はじめに

当申請地は宮域の南西隅の台地縁辺部で近鉄山田線の南、参宮街道から北へ約80mの位置にある。調査区は約12.0m×1.6mを設定した。この調査地のすぐ北側で、第16-6次調査が、南側約30mでは第48-3次・第70-6次調査が実施されており、南側の二つの調査では、弥生時代中期から室町時代にかけての遺構が検出されている。

2)調査概要

この調査区で遺物が出土しているのは、調査区の北隅で検出したSB5977とSK5978だけである。SB5977は竪穴住居で平面規模は不明だが深さは約0.3mである。この竪穴住居の特徴は、1. フイゴの羽口とスラグを出土していること、2. 西壁付近で白い粘土の固まりが見られること、3. 土師器の長胴甕の破片が多いことなどである。以上の事を考慮すると、この竪穴住居から出土した須恵器の蓋は7世紀後半から8世紀初頭であるので、今回検出したSB5977はこの時期の工房である可能性がある。なおこのSB5977のはば中央で、SK5978を検出した。少量の土師器片、須恵器片を出土しており、竪穴住居の付属土塙であろう。

従来、飛鳥時代の遺構が多いとされてきた史跡南部のこの地域に、ある意味で特殊な性格を持つ竪穴住居の存在が判明したことは、その時期の蒜宮跡を解明するうえで貴重な資料を得たといえる。

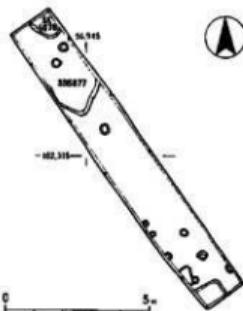


fig. 8 遺構実測図(1:200)

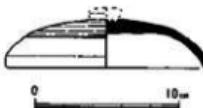


fig. 9 遺物実測図(1:4)

7. 第81-8次調査(6ABD-P)

調査場所 多気郡明和町大字竹川字古里

原因 便益施設(休憩所)の設置

調査主体 明和町

調査担当 明和町斎宮跡保存対策室

調査期間 平成元年11月28日～12月7日

調査面積 186m²

1) はじめに

当申請地は博物館のすぐ北側で、昭和63年度に古里地区整備事業で現状変更を実施したイベント広場の西端部にある。なお、周辺の調査はすぐ西側で実施された第76-11次調査が、南方では第71次・第72次・第74次調査が実施されている。第76-11次調査では飛鳥・奈良時代の竪穴住居や鎌倉時代の井戸、土塹、溝が、第71次・第72次調査では弥生時代から鎌倉時代の多数の遺構が確認されている。

2) 調査概要

調査区の東側で鎌倉時代の土塙SK5979を検出した。遺物は山茶碗、山皿、土師器鍋片が出土した。

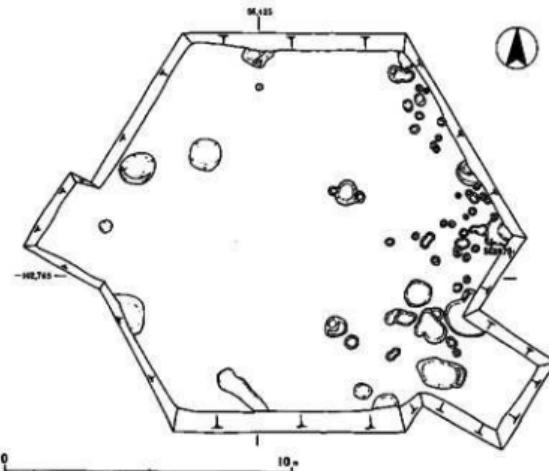


fig.10 遺構実測図(1:200)

8. 第81-10次調査 (6 ADR-V)

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字木葉山
原因 防火水槽の埋設
調査主体 明和町
調査担当 明和町斎宮跡保存対策室
調査期間 平成2年1月6日～1月11日
調査面積 139m²

1) はじめに

当申請地は、宮城中央最南端で、参宮街道から南へ150mの位置にある。周辺の調査は、すぐ西側で第53-11次調査が、さらにその西隣で第58-6次調査が実施され、第53-11次調査では、奈良時代の溝、土塹が、第58-6次調査では、奈良時代の土塹、平安時代の掘立柱建物が検出されている。

2) 調査概要

調査は、南北約20m、東西約6mの長方形の調査区を設定した。調査の結果、調査区中央付近で幅0.25mの周溝をもつSB5980を検出した。南西隅は、町道の鶴溝により破壊されている。周溝の形は方形を呈し、規模は南北4.8m、東西3.2m以上である。遺物は、その周溝から、弥生時代後期の高杯がほぼ完形で出土した。史跡内で検出した弥生時代の竪穴住居は、今回で6例目にあたる。過去検出された竪穴住居は、すべて宮城西部の古里地区であり、今回の例は古里地区以外で確認されたという点で貴重な遺構といえる。

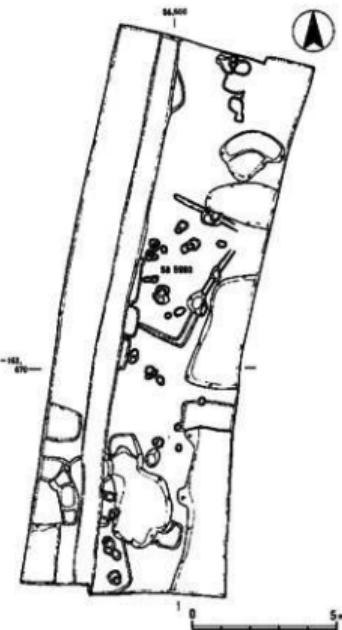


fig.11 遺構実測図 (1:200)

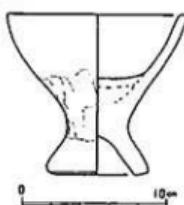


fig.12 遺物実測図 (1:4)

9. 第81-11次調査 (6 ACM-N)

調査場所 多気郡明和町大字斎宮3385-2
原 因 体育庫の移転
調査主体 明和町
調査担当 明和町斎宮跡保存対策室
調査期間 平成2年1月12日～1月19日
調査面積 47m²

1) はじめに

当申請地は、史跡中央西寄りにあたり、近鉄斎宮駅の西方約300mの位置にある。斎宮小学校敷地内では、校舎の増改築に伴なう第15次・第48-13次・第53-1次調査など過去8回の調査が実施されており、奈良時代の竪穴住居、円形周溝、平安時代後期の四脚門、築地跡などを検出している。

2) 調査概要

調査の結果、遺構検出面までの深さは北側で0.8m、南側で0.7mである。遺構は調査区の中央で検出された鎌倉時代の溝S D5981と土塙であったが、そのほとんどが旧建物の基礎などで破壊されていた。

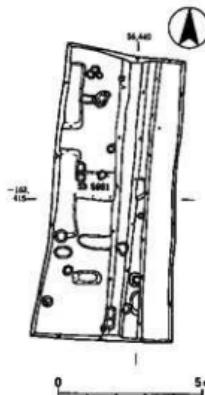


fig.13 遺構実測図 (1:200)

10. 第81-12次調査 (6 AED-A)

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字篠林3225-3
原 因 盛土
調査主体 明和町
調査担当 明和町斎宮跡保存対策室
調査期間 平成2年2月26日
調査面積 40m²

1) はじめに

当申請地は、斎王の森から北北東約200mで、史跡中央部にある篠林地区の最東端に位置する。当該地の南約50mで第37-10次調査が実施されているが明確な遺構は検出されていない。

2) 調査概要

調査の結果、遺構検出面までの深さは約0.5mである。検出した主な遺構は、調査区の北側に柱穴らしきものと、南端で溝を検出しただけで、遺物の出土はほとんどなかった。

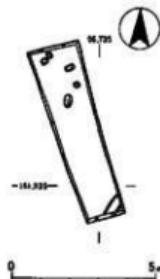


fig. 14 遺構実測図 (1 : 200)

11. 第81-13次調査 (6 A C B - D · E)

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字塚山3276-4, 5

原 因 芝生広場の造成及び案内板の設置

調査主体 明和町

調査担当 明和町斎宮跡保存対策室

調査期間 平成2年3月9日～3月10日

調査面積 16m²

1) はじめに

当申請地は、博物館の西方150mの塚山古墳群内にある芝生広場に案内板、ベンチを設置するため、基礎部分について調査を実施した。当地の北側で第76-1次・第76-6次調査が実施されており、古墳時代の周溝や奈良時代の溝などが検出されている。

2) 調査概要

大小9個のグリットを設定して調査を実施した。G 1 のSK5982から古墳時代の提瓶が出土し、G 2 のSD5983から飛鳥時代の土師器の椀がほぼ完形で2個体出土した。

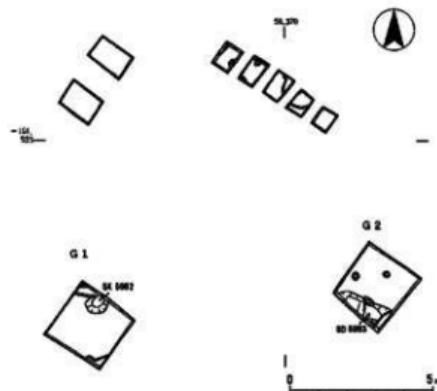


fig. 15 遺構実測図 (1 : 200)

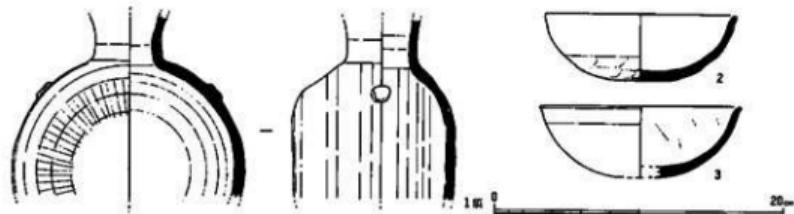


fig.16 遺物実測図 (1 : 4) SK 5982; 1. SD 5983; 2・3

12. 第81-14次調査 (6 A E D - F)

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字楽殿2844-2

原 因 宅地造成

調査主体 明和町

調査担当 斎宮歴史博物館

調査期間 平成2年3月1日

～3月30日

調査面積 191m²

1) はじめに

当申請地は、宮城中央北端付近で斎王の森北方約300mにある。

当該地の東方約50mで第6-1次調査が、北方約30mで第37-7次調査が実施され、また、すぐ西では、第43-5次調査が実施されているが、明確な遺構は検出されていない。

2) 調査概要

今回の調査では、発掘区北側でSD 5984を、発掘区東側で南北に走るSD 5985を検出した。出土遺物がなく遺構の性格はわからない。

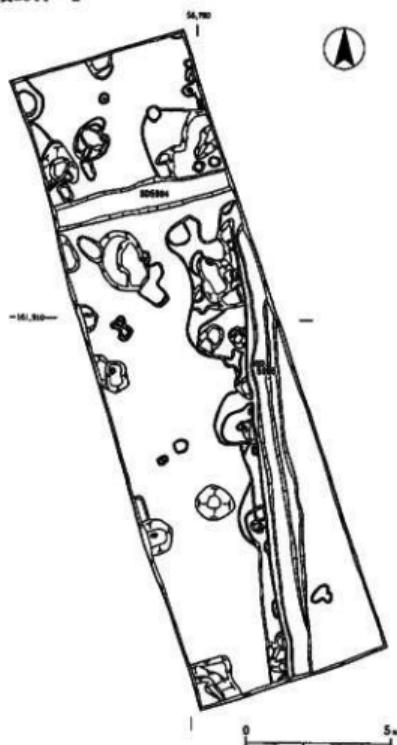


fig.17 遺構実測図 (1 : 200)

13. 第81-15次調査 (6 A E D-U)

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字楽殿2885-2
原因 宅地造成
調査主体 明和町
調査担当 斎宮歴史博物館
調査期間 平成2年3月19日～3月30日
調査面積 220m²

1) はじめに

当申請地は、斎王の森から北方約300mの位置で、宮域の中央北部にある。周辺の調査は第81-14次調査が南東約30mの位置で、すぐ東隣を第6-1次調査が、北方約60mで第37-7次調査が実施されているが、いずれも明確な遺構は確認されていない。

2) 調査概要

地表から遺構検出面まで南北とも約0.5mである。今回の調査では、発掘区の北で溝S D5986を、また全域にわたって擾乱土塙を検出した。

S D5986は長さ約5.0m、幅約0.4m、深さ0.2mで、逆L字の形で検出された。遺物は土師器細片のみで遺構の時期、性格は不明である。

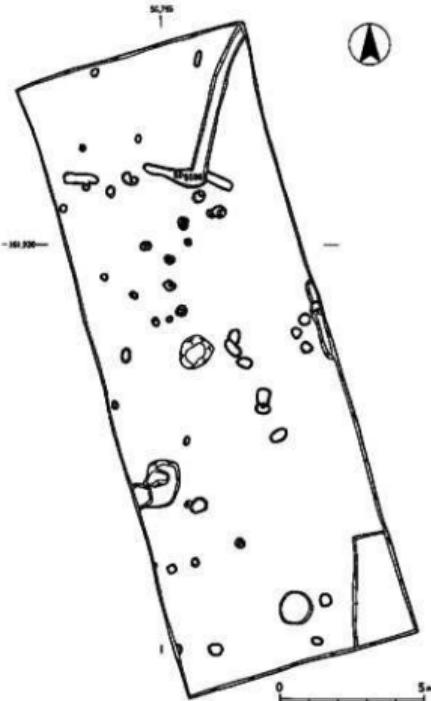


fig.18 遺構実測図 (1:200)

14. 第81-16次調査 (6 AG)

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字北野3655-1
原 因 宅地造成
調査主体 明和町
調査担当 明和町斎宮跡保存対策室
調査期間 平成2年3月22日～3月27日
調査面積 54m²

1) はじめに

当申請地は、史跡指定区域外に位置し、北野公民館から西へ約100m、史跡東部の最北端に隣接する。当該地の西方約200mの位置で、第37-4次調査が実施されており、奈良時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物、溝、土塁が検出されているので、宮城の史跡東部最北端を再確認する目的で実施した。

2) 調査概要

調査区は、当申請地内に3ヶ所のグリッドG1～G3を設定して実施した。

G1・2は時期不明の柱穴、溝などを検出したが、出土した遺物がどれも細片のため造構の時期、性格は不明である。

G3は、東西4.0m、南北5.0mで造構検出面までの深さは0.6mで、溝S D5987と柱穴、土塁を検出した。遺物は、S D5987から綠釉陶器片1点が出土している。また、このグリッドからは、柱穴を多数検出したが、調査範囲が小さいため、建物が建つかどうか判断できなかった。その柱穴の1つから平安時代末期の土師器片が出土している。

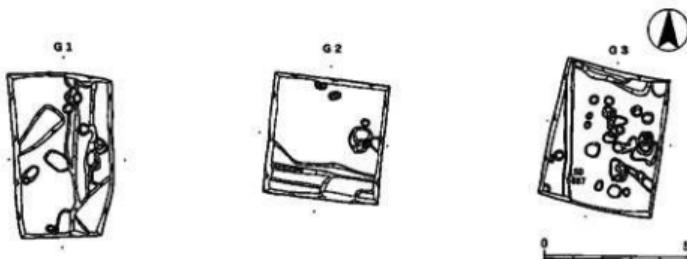
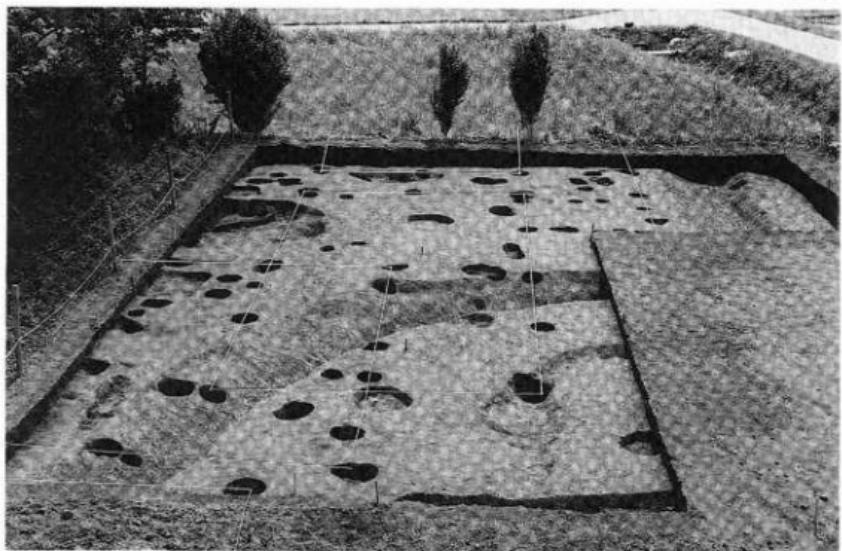
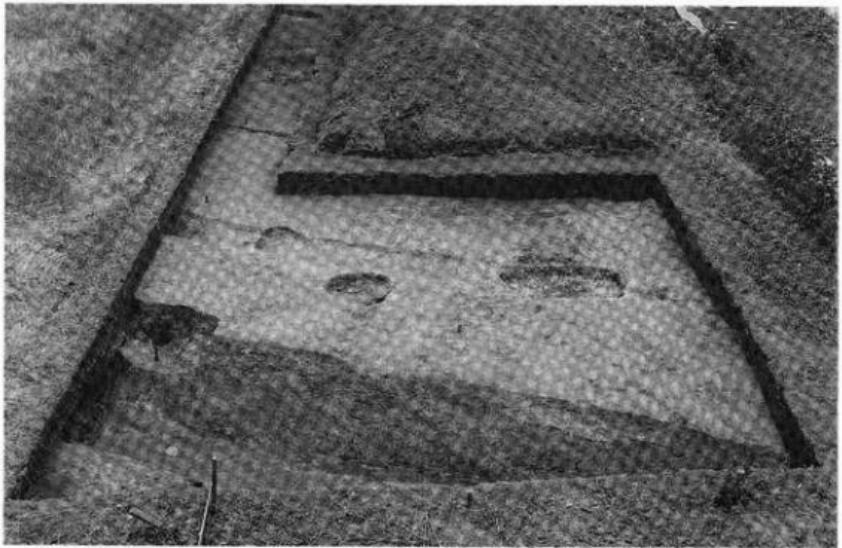


fig. 19 造構実測図 (1 : 200)

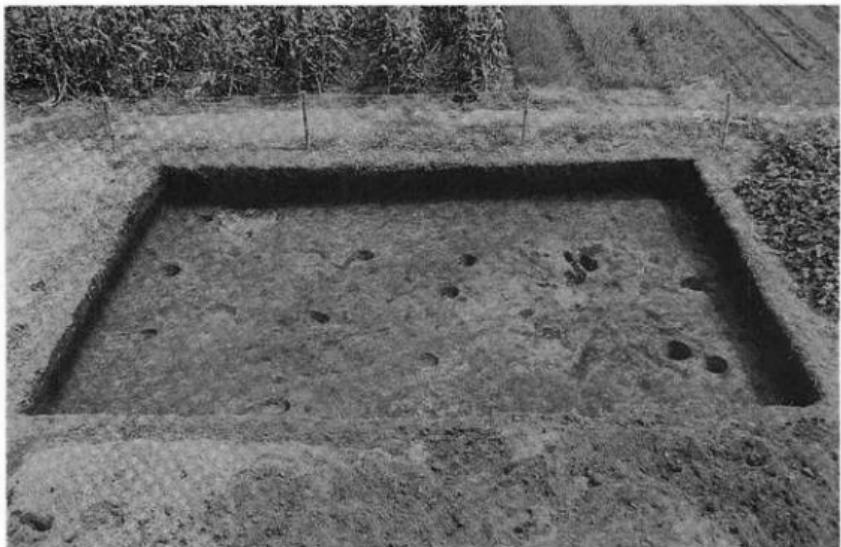
図 版



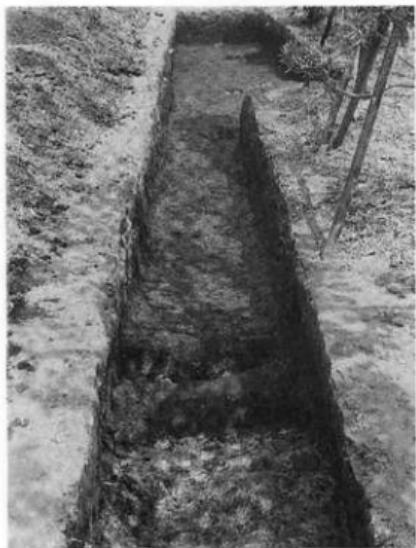
第81—3次調査（西から）



第81—4次 北調査区 SD50（北から）



第81—4次 南調査区（北から）



第81—5次調査（西から）



第81—5次調査 小土塹群（西から）



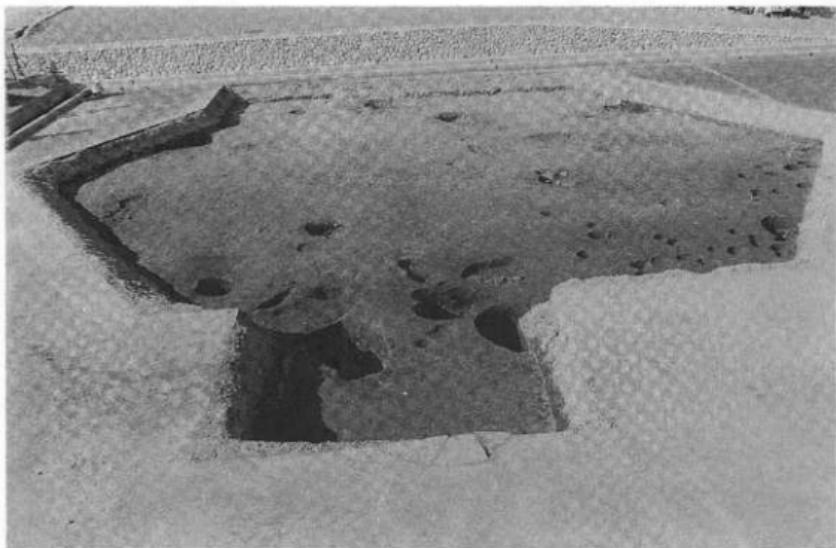
第81—6次調査（南から）



第81—6次調査 S B5975（南から）



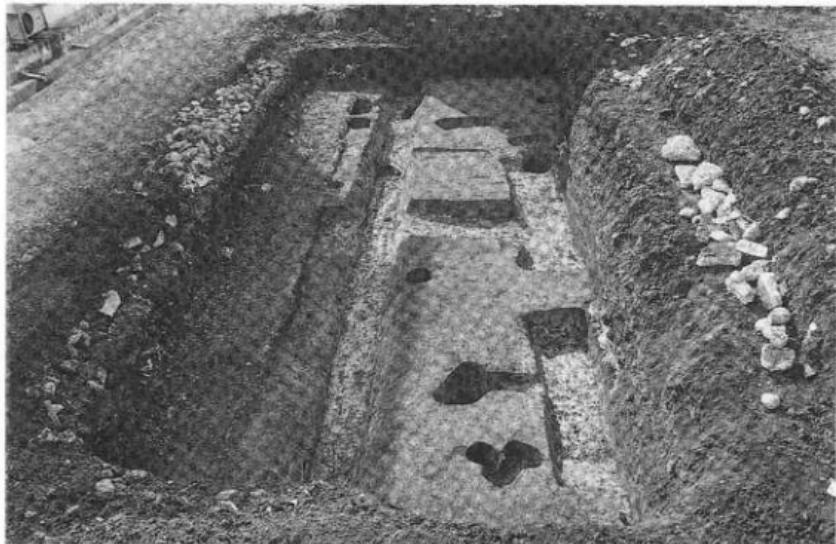
第81—7次調査（北東から）



第81-8次調査（南東から）



第81-10次調査（北から）



第81-11次調査（北から）



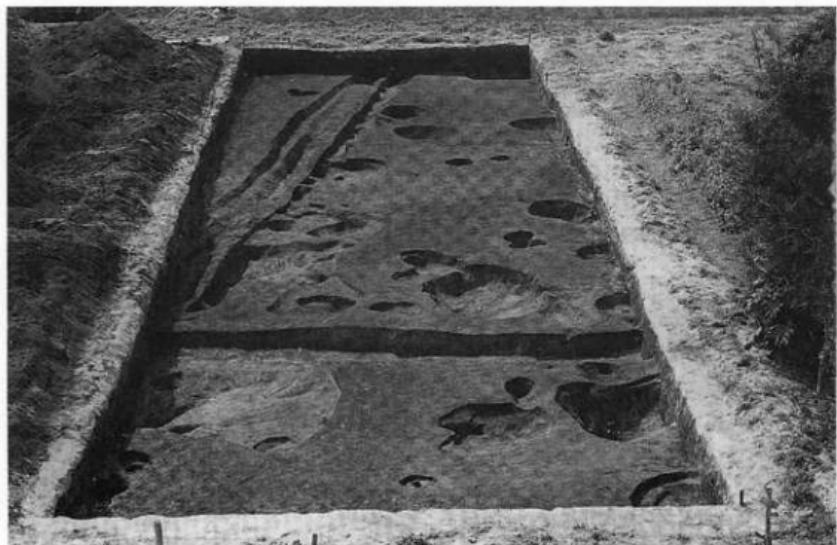
第81-12次調査（北から）



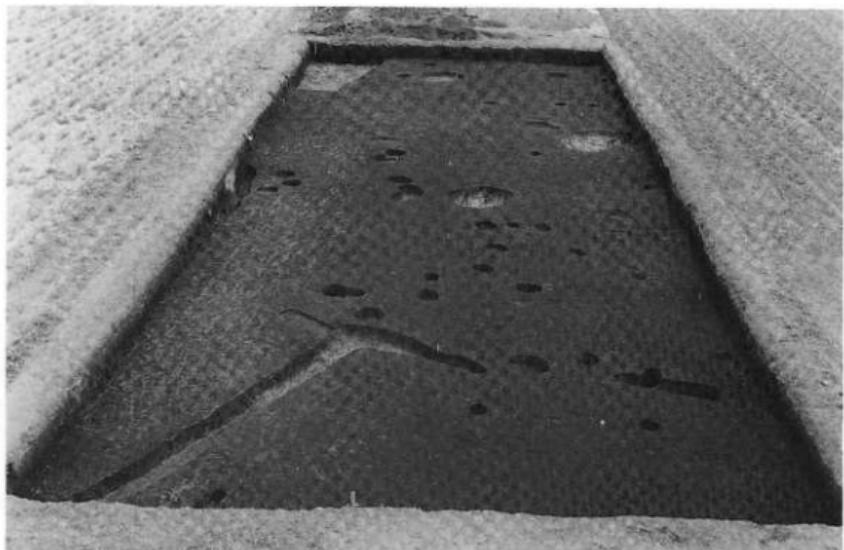
第81-13次調査（南東から）



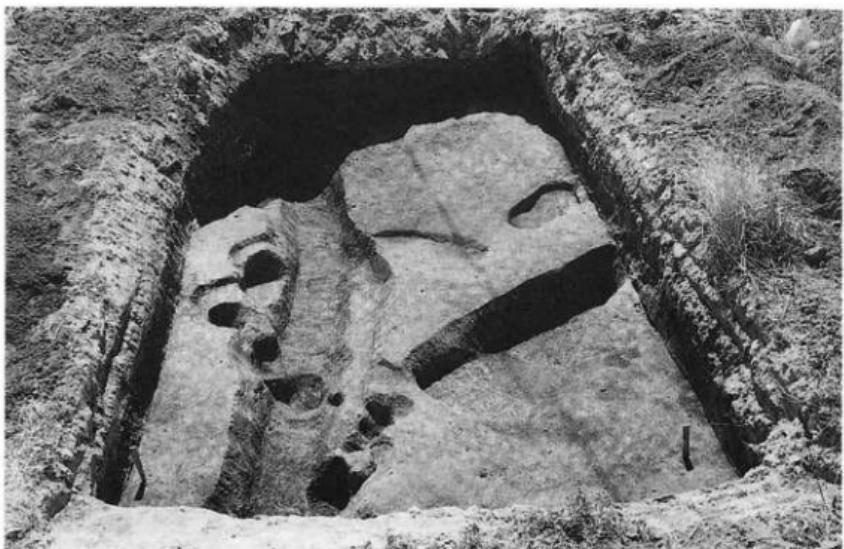
第81-13次調査 G 2 (北東から)



第81-14次調査 (北から)



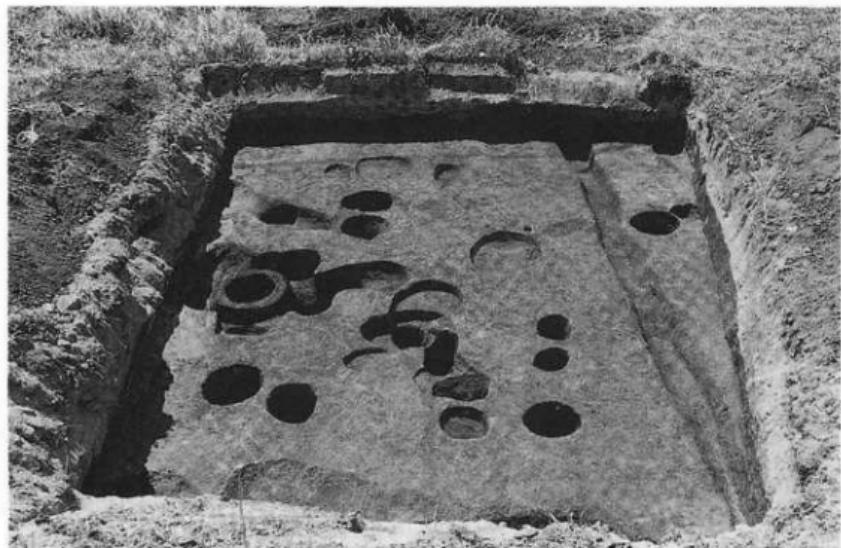
第81—15次調査（北から）



第81—16次調査 G 1（北から）



第81—16次調査 G 2 (西から)



第81—16次調査 G 3 (北から)

史跡斎宮跡
平成元年度現状変更緊急発掘調査報告

平成 2 年 3 月 31 日

編集 斎宮歴史博物館
発行 明和町
印刷 光出版印刷株式会社
